

# いちごの施肥 (完)

## とくに被覆栽培について

農林省野菜試験場久留米支場

本多 藤雄

半促成栽培の施肥量は、収量目標2.5トンとして、三要素とも12~15kgとする(第4図)。そのうち元肥に窒素、加里6~10kg、りん酸12~15kgとして、残りを追肥として分施する。

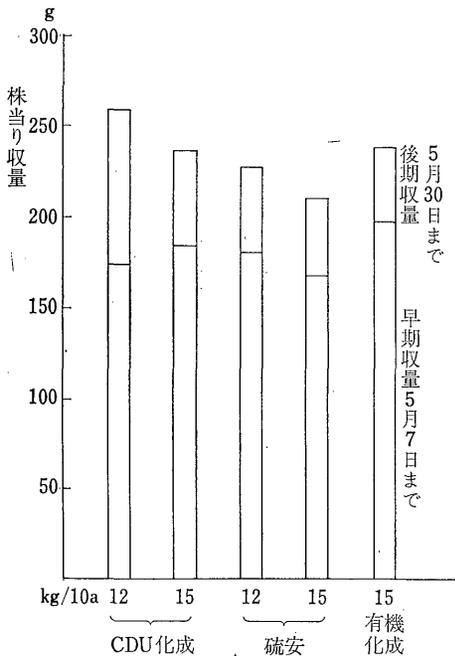
### 5. 電照栽培における

#### 施肥の考え方

電照栽培は半促成栽培の早出しなので、基本的な考え方は半促成栽培に準ずるが、異なる点は、電照によって冬から春にかけて株が繁茂すること、半促成栽培より約1カ月早く収穫でき、しかも収量が多く、4トンを目標とすることである。

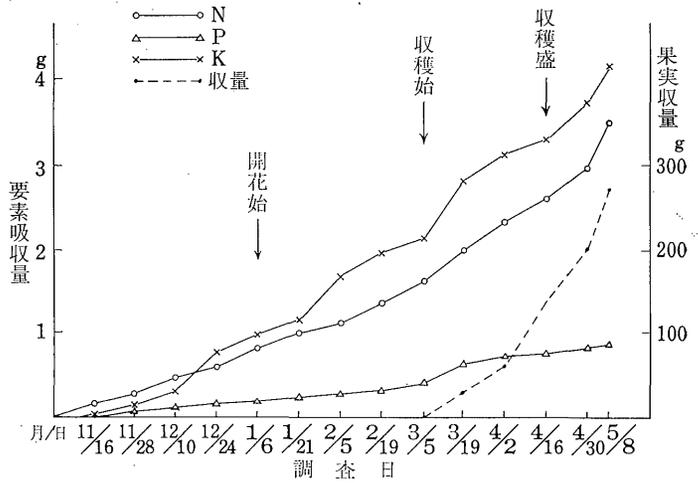
第4図 半促成栽培における施肥量と収量

(品種ダナー・福岡園試 1967)



従って施肥量は窒素18~22kg、りん酸12~15kg、加里20~22kgを標準とし、定植時の元肥として、根をいためないように窒素5~8kg、りん酸12~15kg、加里5kgを全面にすき込んで順調に発育させ、ビニール被覆して電照を始める前に、窒素5kg、加里3kgの追肥をして株の伸長を促し、さらに収穫始から、果実収量に応じて液肥を用いて追肥を行なう。

第3図 半促成いちごの収量と、肥料の吸収経過



(品種八千代・園試久留米 1965)

### 6. 株冷蔵栽培における施肥の考え方

株冷蔵栽培は、10月中旬に苗床でずらしをして細根を多く出させたものを、11月中旬に掘り上げ、根を水で洗って根をいためないようにして、約20~30日間0°Cの冷蔵庫に入れ、12月上旬にハウス内に定植する栽培である。

根の伸長が少ないので、定植時、地中加温で20°Cにあたためたところに植えつけるが、ハウスを被覆しているため、地上部も発達する。

根の伸びが悪いので、根は直接土および肥料にふれていたみやすいので、元肥には根の伸長に必要なりん酸を多くし、土壤溶液濃度の高まりやすい窒素と加里は少なくする。

また地温をあげているため、肥料の分解吸収が早いので、元肥は速効性中心のときは窒素3kg、緩効性中心のときは5~6kgとし、りん酸6~10kg、加里5kg程度とする。

株冷蔵栽培の収量は少なく、第1期の収量が1

第2表 株冷蔵栽培における施肥量と  
肥やけの発生と収量 (柳木農試1966)

施肥量kg/10a N-P-K	株死株率		収量 g/20株	
	1/20	2/20	3/31まで	合計
3.0-2.4-3.0	30.0	68.3	28	506
2.0-1.8-2.0	3.3	33.3	102	1428
1.0-0.6-1.0	0	1.7	165	2756
0.5-0.3-0.5	0	0	318	3149

トン、第2期の収量1トン、合計2トンであるので、全般に施肥量は少なくよく、第1期の収量のみなら全量で窒素、加里は7kgまででよいが、第2期を含めると12kg程度は必要で、その場合、収量に応じて追肥、とくに液肥で施すことが大切である。(第2表)

7. 品質向上と肥培管理

品質をよくするために有機質肥料が使用されているが、有機質や緩効性肥料、硫安分施で3年間半促成栽培で試験した結果は第3表の通りで、3年間を通じ硫安分施が最高であった。

肥料の種類で異なるが、有機質肥料などは初期に障害が少なく、徐々に吸収されるから無難な肥料といえよう。

分施がよかった原因を土壤水分応力\* から考

えると、収穫中に追肥することによって電気伝導度が高まり、土壤水分張力も比較的高pFにすると、第4表のように糖度が高かった。

土壤の水分応力が高くなると根の活動が抑えられ、水分の吸収が少なく、植物体内の細胞液濃度が高まり、葉からの同化生産物の転流が果実へ多くなり、果実の糖度が高くなるものと解釈される。またこの時の土壤水分張力は pF 2.5→2.0、

\* 水分応力=土壤溶液電気伝導度+土壤水分張力をいうが、これは土壤溶液の浸透圧と考えてよい。

第4表 土壤水分、肥料が、いちごの糖度に及ぼす影響 (園試久留米 1970)

施 肥 量	E	C	糖 度		
	元肥後	追肥後	追肥前	追肥後	
硫 安 12kg 12+6 18	0.548	0.230	9.7	8.7	
	0.722	0.366	9.5	9.0	
	0.330	0.360	9.4	8.6	
CDU化成 (追肥硫安) 12+6 18	0.176	0.145	9.7	8.7	
	0.360	0.360	9.5	8.9	
pF	2.5→2.0	0.489	0.269	10.0	9.0
	2.5→1.5	0.404	0.266	9.4	8.6
	2.0→1.5	0.375	0.254	9.4	8.5

土壤溶液の電気伝導度は(1:5)で0.36程度であった。

なお、いちごの施肥に関して大切なことは、有機質素材をいちごの前作に十分施して、通気性をよくし、土壤の緩衝能を高め、有用微生物の増加と二酸化炭素を多くすること、常に適濃度になるように土壤水分を制御することである。

< 目 次 >

- ※ いちごの施肥(完)..... (2)  
とくに被覆栽培について  
野菜試験場久留米支場 本多藤雄
- ※ 微量要素障害の現地試験について..... (4)  
長野県松筑農業改良普及  
所明科支所主任 刈間昭光
- ※ 高知のハウス園芸と肥料..... (6)  
高知県農業協同組合中央会  
農政営農部 十河清暢
- ※ うんしゅうみかん摘果剤利用の現状..... (9)  
農林省農畜園芸局  
果樹花き課 斉藤憲嘉
- ※ [園芸相談車がやってきた]  
高知の施設園芸、土と人..... (11)  
高知県経済連技術課 野中末弘
- 回復した47年の農業総産出額..... (13)
- 48年産米の大豊作は太鼓判..... (14)
- 麦作振興対策決る..... (15)
- あとがき..... (16)